

ウェルビーイング駆動型アントレプレナーシップ¹

横山 恵子² 関西大学商学部
福嶋 路 東北大学大学院経済学研究科
秋庭 太 龍谷大学経営学部
山田 仁一郎 京都大学経営管理大学院

1. はじめに

さまざまな科学領域で、ウェルビーイングという概念が人口に膾炙している。アントレプレナーシップという研究分野においても、言わずもがなである。

Well-being と Entrepreneur*で、Web of Science で検索すると、1,212 件がヒットする（2023年6月20日時点）。本稿では、そのうちの LCS（Local Citation Score）が高い 50 論文（LCS トップ 50 論文）が、どのような議論を展開しているのか検討した。その結果、ウェルビーイングとアントレプレナーシップに関する研究の特徴とリサーチ・ギャップを見いだすことができた。本稿は、そのリサーチ・ギャップに基づき、経済合理性だけでなく、企業家個人のウェルビーイングを強く意識して、それに駆動された起業のあり方である「ウェルビーイング駆動型アントレプレナーシップ」の概念創造と、その特徴や影響について、試論的に検討するものである。

2. ウェルビーイングの定義と企業家的ウェルビーイング

ウェルビーイングはいくつかの要素から成り立っている。例えば、経済開発協力機構（OECD）は、Better Life Index を、膨大な先行研究や議論をベースに開発した。このインデックスは、11 の項目で構成されている。11 の項目とは、住居、所得と富、雇用・仕事の質、環境の質、仕事と生活のバランス、社会とのつながり、知識と技能、健康状態、市民参画、安全、主観的幸福である。

Seligman（2018）は、ウェルビーイングの構成要素として、PERMA 理論という仮説を立た。ポジティブな感情（Positive Emotion）、没頭（Engagement）、人との良い関係（Relationships）、人生の意義（Meaning）、達成（Accomplishment）の 5 つを挙げている。また Rath & Harter（2010）は、ウェルビーイングを、Career Wellbeing（仕事に限らず、自分で選択したキャリアの幸せ）、Social Wellbeing（どれだけ人と良い関係を築けるか）、

¹ 本研究は、科研費 23K01535、23H00845 および 2023 年度関西大学研修員研究費からの支援を受けて行われました。また本研究の元となった議論は、2023 年 10 月 28 日に開催された組織学会年次大会（関西大学）においてセッション報告されたものであり、本共同著者とともに、長山宗広先生（駒澤大学経済学部）と金間大介先生（金沢大学融合研究域）も報告メンバーでありました。

²² 責任著者。yokokei@kansai-u.ac.jp

Financial Wellbeing（経済的に満足できているか）、Physical Wellbeing（心身ともに健康であるか）、Community Wellbeing（地域社会とつながっているか）の5種類に分類している。

一方、アントレプレナーシップ領域においては、ヘドニック・ウェルビーイング（Hedonic well-being: 快楽的幸福）と、ユーダイモニック・ウェルビーイング（Eudaimonic well-being: 自己実現的幸福）の古典的な2分類を用いる研究が多い。ヘドニック・ウェルビーイングは、快楽達成と痛みを回避する観点からの幸福であり、ポジティブ感情や喜びを感じ、苦痛や不快感がない状態を指す。これに対しユーダイモニック・ウェルビーイングは、人生に意味を感じるか、自分のポテンシャルをフルに生かしているか等、単なる幸せや喜び以上のもので、自己実現の観点からの幸福を指す。ちなみにユーダイモニアはアリストテレスの哲学に由来する幸福の概念である（Kahneman, Diener, and Schwarz, 1999）。

3. 先行研究の検討と本研究の立ち位置

LSC トップ 50 論文の中には、システマティックレビューを行った Stephan (2018) や、Journal of Business Venturing において特集号の編集者としてレビューを行った Wiklund, et al. (2019) の論文が含まれている。したがって、LSC トップ 50 論文は、現段階でのアントレプレナーシップとウェルビーイングに関する研究の傾向を調べる上で適したサンプルだと考えられる。以下では、LSC トップ 50 論文を概観して見出した特徴を整理する。

第一に、企業家的ウェルビーイング（Entrepreneurial well-being）と他の要素との関係を検討する実証研究が散見された。企業家的ウェルビーイングとは、ベンチャー³の発展、成長、運営に関連した満足感、ポジティブな感情、頻度の低いネガティブな感情、心理的機能の経験を指す（Wiklund, et al., 2019）。

企業家的ウェルビーイングに影響を与える要素として、起業体験（Nikolaev, 2020）、起業のストレス（Baron, et al., 2016; Kollmann, et al., 2019; Lerman, et al., 2021）、コーピング（Uy, et al., 2013）、マインドフルネス（Roche, et al., 2014）、フロー状態、生産性、成功（Sherman, et al., 2016）、向社会的動機づけ（Kibler, et al., 2019）、仕事と家庭の葛藤（Parasuraman, et al., 1996）といった多様なものが検討されてきた。逆に、企業家的ウェルビーイングが影響を与える要素として、業績（Dijkhuizen, et al., 2018）を検討しているものもあった。

第二に、企業家のウェルビーイングの度合いを比較考察するものがいくつか見られた。企業家や自営業者と従業員や給与所得者との比較（Stephan & Roesler, 2010; Seva, et al., 2016; Hetschko, 2016）、機会発見型起業家（opportunity entrepreneurs）と生計型起業家（necessity entrepreneurs）との比較（Amoros, et al., 2021）、地域間での比較（Abreu, et al., 2019）といったものが挙げられる。

第三に、企業家的ウェルビーイング研究のレビュー論文がみられ、これまでの研究動向がまとめられている（Stephan, 2018; Wiklund, et al., 2019）。そのような中で、ユーダイモニッ

³ 本稿では、本邦におけるアントレプレナーシップ領域の研究の用語としての「ベンチャー」と「スタートアップ」に本質的な差異があるとは想定せずに論を進める。

ク・ウェルビーイングの観点からのアントレプレナーシップ研究の必要性を説く研究 (Ryff, 2019) が存在する。

以上の研究からわかったことは、企業家的ウェルビーイングの研究には、①異なる集団のウェルビーイングの程度を調べ比較するもの、②「先行要因➡企業家的ウェルビーイング➡成果」という構図を前提に調査されたものが多いことである。先行要因➡企業家的ウェルビーイングで言えば、起業家的ウェルビーイングを高めた要因に、起業家的ウェルビーイング➡成果で言えば、起業家的ウェルビーイングによる成果に着目して、様々な研究が展開されてきている。その多くは、定量研究である。

これらの先行研究の動向から言えることは、これまでのアントレプレナーシップとウェルビーイングに関する研究は、起業「後」の企業家的ウェルビーイングに着目して研究がデザインされているということである。私たちは、そこにリサーチ・ギャップを見いだした。先行研究のリサーチ・ギャップとして、起業「前」の企業家（の卵）に宿るウェルビーイングを抽出した。

本研究は、企業家（の卵）の行動原理としてのウェルビーイングに着目して、ウェルビーイングが駆動する起業のあり方、経済合理性だけでなく企業家個人のウェルビーイングが強く作用した起業である「ウェルビーイング駆動型アントレプレナーシップ」の概念創造と解明に試論的に迫る。そのために、ウェルビーイング駆動型起業の契機、特徴、影響について、2つの事例から検討する。

事例選択においては、企業家個人のウェルビーイングが強く作用した起業が群生した2事例を、理論的・実践的含意が導出できる事例として選択した（辻本, 2024）。下記では、盛岡市と札幌市の2事例について考察することで、「ウェルビーイング駆動型アントレプレナーシップ」の概念創造とその解明について試論的に迫るものである。

4. 事例1：アルプス電気盛岡事業所 OB のスピンオフ事例

(1) ウェルビーイング駆動型起業の契機

2002年に岩手県盛岡市にあったアルプス電気盛岡事業所が閉鎖された。盛岡事業所はプリンターの開発を担っており、およそ550名のエンジニアや研究者が在籍していた。事業所の閉鎖は2002年の正月明けの突然のことであり、従業員を含む地域全体が混乱に陥った（Fukushima, et al. 2022）。

アルプス電気から盛岡事業所の従業員に対して5つの選択肢が提示された。①岩手県外のアルプス電気の別事業部に異動（単身赴任になる確率が高い）、②岩手県内の別企業に転職、③岩手県外の別企業に転職（単身赴任になる確率が高い）、④岩手県に残り、起業する、⑤もっと市場の大きい岩手県外で起業する。この中で選択肢④を選んだ人が起業家となっていった。

慣れ親しんだ職場を突然失うという強烈な経験は、彼らに人生を振り返り、ウェルビーイングや働き方・生き方を見直す契機を与えた。その中で彼らは自分にとって何が人生の最優

先事項なのかを考え、彼らは家族と住み慣れた地で生きるという選択肢を選んだ。またこれを可能とするようないくつかの条件もそろっていた。

例えば、①家族や本人が岩手県出身者で地域に根付いていた、②本人が専門性の高い尖った技術やスキルを有していた、③起業した際に発注してくれる取引相手が地域にいるという確信があった、④困ったときに手を差し伸べてくれる企業が周囲に複数あった。また⑤起業に対して積極的に支援を行う主体（例えば岩手県、岩手大学、盛岡市、公認会計士などの起業支援サービス）が充実していたことも、彼らの意思決定にあたり重要な材料であった。

(2) ウェルビーイング駆動型アントレプレナーシップの特徴

彼らの経営の共通点として、第一に自身のもつ専門特化した技術をコアとし、それを基盤として事業を展開していることが挙げられる。彼らがアルプス電気在職中、創業者である片岡勝太郎社長によって「自分で食っていける力」をつけることを叩き込まれていた。その教えを守った彼らは、自身のもつ技術やスキルに自信とプライドをもっていた。

また技術やスキルに対する厳しい目は自分のみならず同僚にも向けられ、従業員同士は互いのもつ技術やスキルを常に目配りしていた。また彼らの技術を必要とする顧客がいるという確信が、起業の意思決定に際して楽観的に作用したと考えられる。

第二に、彼らは起業後、アルプス電気を辞め岩手で起業した仲間と連携して仕事を受注したり共同開発をしたりしている。彼らの技術は専門性が高く狭いため、自社だけでは受注を網羅できない場合、同じ盛岡事業所を辞め起業した仲間に声をかけて協力を募った。彼らは盛岡事業所で一緒に働いた経験から、互いの強み・弱みや仕事の仕方や質を知っていた。彼らの関係は、「能力に対する信頼」に基づいていた。また盛岡事業所での仕事のやり方を共有していたので、「阿吽」の呼吸で仕事を進められた。彼らは、どんな難題でも、アルプスOBと組めば対応できるという自信を持っていた。

第三に、彼らは企業成長において、規模の拡大を第一の目標にしていなかった。彼らが経営者になったのは、やりたいことができる幸せを大切にしていたからである。彼らの経営にはこのような考え方が反映され、社内で新しい事業が育ってくると、独立することを推奨した。こうしてスピノフからスピノフが生まれるという現象が数多く見られた。自社の従業員に早いうちから自由と責任を経験させるという方針が、これら企業の経営の特徴である。

(3) ウェルビーイング駆動型アントレプレナーシップの影響

ウェルビーイングを優先し地域で起業した人たちが複数集積したことによって、地域に変化が現れた。第一に、盛岡事業所からのスピノフ同士で、困ったときに人を融通しあう（従業員のやりとりによる助け合い）という現象がみられた。どこかの会社の調子が悪くなった時に、余剰人員を他の会社に一時的に雇用してもらったり、逆に他の会社の人員を引き受けたりしている。また、起業をする前に他の企業で修行をするという事例も見られた。彼らは技術的にも互いに運命共同体のような存在であったため、互助の精神が自然に生まれたのだと思われる。

第二に、このような関係の中から、盛岡事業所からのスピノフたちが中心となって、医

療機器クラスターの形成が図られた。彼らは TOLIC (TOhoku Life science Instrument Cluster) と呼ばれる産官学金のネットワークを結成し、ユニークな医療機器の開発を目指している。定期的にカンファレンスを開催し、岩手県内外の大学の研究者や企業の最新の研究を発表したり、岩手県内の企業や学生の発表などが行われたりしている。またこの団体は、地域の将来を担う人材の育成も行っている。例えば、医療機器の世界最大の展示会、MEDICA に高校生や高専生を毎年2～3名連れていき、一緒にマーケティング活動を行っている。スピノフたちの、地域の将来を考えた活動は、地域に対する恩返しであり、将来に向けての種蒔きでもある。

第三に、彼らのそのような姿は、次の世代にも影響を与えている。スピノフたちの企業のいくつかは後継者を得ている。スピノフ経営者の息子たちは、一時は岩手を出て大学進学や就職をしても、やがて親が設立した企業やその関連事業に参画し、岩手に定着するようになっていく。親の生き方が、彼らの人生選択に影響を与えているのである。父親の世代が盛岡事業所で築いたようなネットワークを、若い世代が構築できるかどうかはまだわからないが、岩手の将来を担う次の世代が徐々に現れ動きだしていることは疑いない。

第四に、岩手県内外に人の循環が生み出されてきている。盛岡事業所で一緒に働いていたが、事業所閉鎖時に他の事業所に異動したり転職したりした元の同僚たちが、岩手に戻りスピノフに雇用されるようになっていく。スピノフが彼らにとって受け皿のような存在となっている。

5. 事例2：サッポロバレー

(1) ウェルビーイング駆動型起業の契機

サッポロバレーとは、1976年頃に北海道大学工学部の青木由直教授のマイクロコンピューターの研究会（以後、北海道大学マイコン研究会）に端を発するITベンチャーの集積のストーリーを指している。シリコンバレーでアップル・コンピューターが起業したのとほぼ同時期に、北海道大学マイコン研究会も活動を開始しており、大学生およびマイコンの情報を求める業界人たちが全国から参加していた。

1980年代のソニーやシャープから発売されていたパソコン向けの簡易言語を開発したのは、北海道大学マイコン研究会に関連した学生や院生が中核となったITベンチャーであった。

この1970年代初期は後のパソコンに繋がるマイコンがあらゆる分野に組み込まれ爆発的に成長した時期の直前にあたりITベンチャーにとって新規参入するチャンスに恵まれていた。金融機関や自治体の大型のシステムを開発し保守する企業は、大規模化する傾向があったが、それ以外の札幌のITベンチャーはなぜか次々にスピノフして独立起業する傾向が強かった。最も初期段階からある中核的な4社からのスピノフを追跡してもかなりの数に上っている(Akiba & Yamada,2024)。

同様に、北海道大学出身者に限らず、札幌ではITエンジニアの起業が相次いでいたと考

えられる。札幌の IT ベンチャー数は 1982 年頃には 160 社、2000 年頃には 300 社を超えているとされるが、実態としてはもっと多かったとの証言もある。1990 年頃、独自のオリジナルなソフトウェア開発は北海道のソフトウェア開発の 30%を超えており、当時のアップル社やソニーとの直接取引する急成長ベンチャーなどの存在もあり、他地域に比べて圧倒的に多く(Akiba & Yamada,2024)、札幌の IT ベンチャーの独自性は明確であった。

このように札幌の IT ベンチャーの集積は自然発生的に生まれ、急速に成長していた。この動向に気がついた札幌市は、1984 年に札幌市ベンチャーランド構想として事業化を決定し、大規模なテクノパークの造成・分譲を実施している。このような行政の動きは、IT 起業家や市民プロジェクトに対して予算を確保し支援することで産業振興を図ろうとする動きにつながり、1990 年代後半までずっと継続されていた。

(2) ウェルビーイング駆動型アントレプレナーシップの特徴

札幌の IT ベンチャーの集積は、歴史も長く規模も大きい。残念ながら、全体像を正確に検証できる信頼性の高いデータベースは存在しないが、25 年間のスノーボールサンプリングによる直接ヒアリング・データ (67 件) が存在する(Akiba & Yamada,2024)。そこから、札幌の IT 起業家のアントレプレナーシップをウェルビーイングの視点から解釈すると、以下の特徴が見い出される。

第一に、札幌の IT 起業家の技術力は高く評価されており、起業家自身もその技術をコアにエンジニア起業家として起業したケースが多い点が挙げられる。1970 年代終わりから勃興した低性能のワンチップマイクロコンピュータのプログラミングには、ハードウェアを知り尽くした職人的なエンジニアを必要とし、札幌の IT ベンチャーがその供給源となっていた。1980 年代のパソコンに標準搭載されていた簡易言語は札幌の若いエンジニア起業家がほぼ単独に近い形で書いたとされている。一世を風靡した NTT ドコモの i モードのブラウザは、他地域のエンジニアが作れずに苦勞していたところ、札幌のエンジニア起業家が 2 週間で作成したという逸話が残っている。またフルデジタルアニメーションや暗号化、VoIP など当時の最先端技術の多くを札幌のベンチャーが手掛けていた。

第二に、多くの起業家は企業成長を優先順位の高い目標にしていなかった。札幌の IT 起業家の中心的な語りは、住み慣れた「札幌で暮らす」と「自分のやりたいことを組織に縛られずにやる」ために起業したというものである。当事者として語ることもあれば、第三者的な評価としての語りもあるが、「(技術者として) 自分のやりたいこと」という表現は、何度も繰り返し出現した。この表現と裏腹に「技術者としての自己満足のために起業している。」との表現もあるが、このことはエンジニア起業家の自己実現と起業が深く結びついていたことを暗に示しているとも言える。また企業成長(スケーリング)を目指す言説を聞くことは、稀だった。

第三に、札幌の IT ベンチャーの集積において、スピノフは広い意味で許容されていた。IT エンジニアが独立することは、独立元企業からみれば、戦力の喪失である。しかし、スピノフした IT 起業家が受発注のネットワークから締め出されたり、圧力をかけられたりと

いった語りは、一度も出てきていない。そのため、札幌の IT 起業家は独立に対して「リスクを取る」といった印象が薄く、カジュアルにスピンオフして起業するといった印象が強い。スピンオフした後、独立元の企業から、発注が受けられたかどうかについては産業の規模が大きいので確認しきれていない。だが、「ソフトウェアの開発を受託しますと看板を掲げれば、その日のうちに電話がかかってくるような状態だった」との証言があるように、札幌には豊富な受注案件が存在していた。

(3) ウェルビーイング駆動型アントレプレナーシップの影響

第一に、「やりたいことを組織に縛られずにやる」人々によるアントレプレナーシップは、北海道における自生的な分厚い IT 人材のプールを形成することにつながった。サッポロバレーのムーブメントの草分けとなったシステムハウス・BUG 社の創業者リーダーだった服部氏らは、起業に際して「やはり札幌に住み続け、好きな開発の仕事を自由に継続したい」と語っている。

2018 年の特定サービス産業実態調査によると、ソフトウェア業の都道府県別の産業売上高および従業員数で北海道は、東京、大阪、神奈川、愛知、福岡について全国 6 位にランキングされている。ソフトウェア業は圧倒的に首都圏を含む三大都市圏の売上が大きい。福岡と北海道は地方としては事業所数も売上高も目立って大きい。北海道に多くの事業所があることは IT 人材の受け皿と、その人材を育てる全国からの受注が存在していることを示しており、IT 産業にとって重要なエコシステムの基盤が存在していると判断できる。

第二に、札幌ビズカフェという、補助金に頼らない独自スキームによる起業支援施設を生み出した。インターネットが普及し始めた時期に、大学関係だけではなく、官民の自発的で活発な交流がうまれた。ネットワーク・コミュニティ・フォーラム (NCF) といった市民プロジェクトを行政が活発に支援し、そこで育まれた市民起業家と IT 起業家が連携して、学生や行政なども巻き込みながら、札幌ビズカフェが設置された。この取り組みは、全国的に注目を集めた。

第三に、環境変化の悪化の影響を受けやすかったと考えられる。北海道と福岡のソフトウェア業の売上は、1990 年時点ではほとんど差がなかった。しかし、1990 年を基準にした 2015 年の都道府県別売上は、全国平均が 162.4% の上昇であるのに対して、福岡県は 182.6% であり、北海道は 94.6% の上昇にとどまっている (Akiba & Yamada, 2024)。IT ベンチャーの主な資金供給元であった北海道拓殖銀行が、1997 年に倒産したことが影響しているだろう。

1990 年代の北海道のオリジナルソフトウェアの売上高比率は 32.4% と高い水準にあり、福岡県はわずか 4.2% に過ぎなかった。しかし、1997 年にかけて北海道のオリジナルソフトウェアの売上は急降下していく。1990 年から 1997 年にかけての北海道の売上高減少幅は、このオリジナルソフトウェアの減少幅にほぼ一致しており、開発資金を先行投資してあとから資金回収するオリジナルソフトウェアのビジネスモデルが機能しにくくなったことが指摘できる。

一方で、日本のパソコン産業の黎明期を支えてきたともいえる歴史的経緯がありながら、

近年の北海道は、90年代後半と2000年初頭の高評価の反動のように、「スタートアップ不毛の地」と揶揄されることもある。ベンチャーの集積などのエコシステムのスケールアップが注目を浴びる事が多いが、札幌のIT企業家群像の解釈はそのような単純な通説的な視点では十分ではない事実を伝えている。また近年では、ウェルネットやエコモット、クリプトン・フューチャー・メディアなどオリジナルのサービス事業を展開する企業が存在感を示している。

6. 結論と含意

(1) ウェルビーイング駆動型起業における「立地」の重要性

岩手の中とはいえ、盛岡市は准都市といえるが、起業家が立地した八幡平市はどちらかと地方に分類される。しかし地域として八幡平市には起業支援サービスが充実し、起業活動も起こりつつあり、起業に恵まれた地域といえよう。またサッポロバレーも、生活する場としての高い魅力や、情報通信技術（ICT）研究で高いプレゼンスのあった北海道大学がJR札幌駅から至近距離に立地し、その間に一時期は札幌ビズカフェが立地していたことなどに代表されるように、ポジティブな起業環境を当時は持っていた。このように、ウェルビーイング駆動型起業において、「立地」は非常に大きな意味を持つ。

Abreu et al. (2019) は都市、准都市、地方という3カテゴリーの分類の中で准都市がウェルビーイングにとって望ましいとしたが、それぞれの地域の起業支援サービスの充実度などを見ていく必要性はある。また Kautonen et al. (2024) が sense of place というように、ウェルビーイングを生み出す立地についての評価は、企業家の主観に依存し、客観的な指標だけで判断できるとは限らない。

(2) ヘドニックとユーダイモニックなウェルビーイングを両立させるための起業

盛岡事業所閉鎖後に起業をした人々は、ある意味では自分の技術やスキルをもち、それに対して自信をもっており、盛岡事業所閉鎖までは自己実現やキャリア、つまりユーダイモニック・ウェルビーイング（Eudaimonic well-being: 自己実現的幸福）を優先して追求していた。他方、盛岡事業所閉鎖後に、他事業部に配属になると、多くの社員が単身赴任とならざるを得ず、ヘドニック・ウェルビーイング（Hedonic well-being: 快楽的幸福）は満たされなくなる。それを解消するために家族のいる岩手で起業という選択肢が選ばれていた。

彼らはヘドニック・ウェルビーイングとユーダイモニック・ウェルビーイングのどちらかの選択ではなく、両方を必要としていた。事業閉鎖という混乱の中で人生を見直す機会に直面し選択に迫られた時、彼らはこの二つを両立させるために「岩手で起業」という意思決定をしたのである。

実際、起業によって彼らは両方を手にした。また彼らはそれによって地域の中での新たな活動を創り出し、新たなやりがいを見出し、さらにユーダイモニック・ウェルビーイングを充実させている。これが可能になったのも、彼らが40台後半ぐらいの年齢であったことや、周囲にアルプス電気盛岡事業所ほどの雇用吸収能力をもつ企業が不在であったことも挙げ

られる。

単身赴任者が多い日本社会は、ウェルビーイング駆動型アントレプレナーが生まれやすい環境にあると言えるかもしれない。またアルプス電気盛岡事業所の事例によると、起業家が感じる地域の支援や寛容さも、起業の選択に強い影響を与えると思われる。地域はヘドニック・ウェルビーイングの充実を踏まえた起業推進政策を考える必要がある。

(3) ウェルビーイング駆動型アントレプレナーシップと急成長志向を超えて

地域とアントレプレナーシップに関して、Saxenian (1994)やKenney (2000)などのシリコンバレーの萌芽的研究は、急成長スタートアップの典型的なモデルを示したともいえる。一方で、O'Mara (2020)は、シリコンバレーの長い歴史の中で、スタートアップとは猛烈に働いて競争に勝ち抜き、大きな成長とエクジットを達成することだという規範が形成されてしまったと指摘している。起業家は、貪欲に機会を探索し追求する存在とされ、Shane & Venkataraman (2000)の理論をはじめ、Teece (2007)、Stam (2015)、Spigel (2020)、Stam & van de Ven (2021)といった多くの関連理論にこれらの考え方は組み込まれている。

経済成長の原動力となる高成長志向の起業家活動を支援することは、政策担当者にとっても重要な施策となっているが、「起業家が投資家から資金を調達して成長を目指すことは、社会全体にとって良いことである」とする単純化された社会的規範形成そのものが、起業家のウェルビーイングに対して収奪的に働きかねないと、本研究では警鐘を鳴らしたい。Akiba & Yamada (2024)は、高成長志向起業家が投資家からみて都合の良い起業家像を無意識のうちに演じている可能性を指摘している。

このような現象が生じている背景として、起業家として生きる主体性や、自律性、情熱や喜びといった起業家のウェルビーイングにつながる行動原理についての観察が省略されてきたことが一因であると考えられる。起業家は、利益にのみ左右されるわけではないし、既存秩序や政府権力に対して抵抗する自由の中に自分たちの生き方を見出す傾向も報告されている (Chandra, et al. 2021; Dey & Steyaert, 2016)。官製「支援」の動きや外部の投資家から「助言」が、独立性を優先する起業家にとって、ノイズや好ましからぬ介入に受け止められることがサッポロバレーの事例では数多くみられ、そのようなすれ違いの流れが地域全体のネットワークや雰囲気醸成に影響を与えた可能性も考えられる。

本研究で最後に指摘したいことは、見落とされてきたアントレプレナーシップともいえる「ウェルビーイング駆動型アントレプレナーシップ」という概念を導入することで、真に豊かな生活と豊かな地域のあり方を議論する土壌に立てるのではないかということである。企業家個人のウェルビーイングは、地域や他者との関係性の中で生み出され、結果として他者のウェルビーイングにも鈍感ではいられないアントレプレナーシップの姿を2事例からみることができた。関連して、ライフスタイル企業家、ライフスタイル・アントレプレナーシップという類似概念も登場してきている (Ivanycheva, et al., 2023)。これらの概念は、より小規模なベンチャーを意図しているようにみえるが、これらの概念との類似点、相違点を検討していく必要がある。

References

- Abreu, M., Oner, O., Brouwer, A., & van Leeuwen, E. (2019). Well-being effects of self-employment: A spatial inquiry. *Journal of Business Venturing*, 34(4), 589-607. <https://doi.org/10.1016/j.jbusvent.2018.11.001>
- Akiba, F., & Yamada, J. (2024). "Stay small" syndrome in the rise and stall lifecycle of industrial clusters: evidence from Sapporo Valley cluster. In L. Lazzeretti, T. Ozeki, S. R. Sedita, & F. Capone (Eds.), *Clusters in Times of Uncertainty* (pp. 29-48). Edward Elgar Publishing. https://EconPapers.repec.org/RePEc:elg:eechap:22500_2
- Amorós, J. E., Cristi, O., & Naudé, W. (2021). Entrepreneurship and subjective well-being: Does the motivation to start-up a firm matter? *Journal of Business Research*, 127, 389-398. <https://doi.org/10.1016/j.jbusres.2020.11.044>
- Baron, R. A., Franklin, R. J., & Hmieleski, K. M. (2016). Why entrepreneurs often experience low, not high, levels of stress: The joint effects of selection and psychological capital. *Journal of management*, 42(3), 742-768. <https://doi.org/10.1177/0149206313495411>
- Chandra, Y., Tjiptono, F., & Setyawan, A. (2021). The promise of entrepreneurial passion to advance social entrepreneurship research. *Journal of Business Venturing Insights*, 16, e00270. <https://doi.org/10.1016/j.jbvi.2021.e00270>
- Dey, P., & Steyaert, C. (2016). Rethinking the space of ethics in social entrepreneurship: Power, subjectivity, and practices of freedom. *Journal of Business Ethics*, 133, 627-641. <https://doi.org/10.1007/s10551-014-2450-y>
- Dijkhuizen, J., Gorgievski, M., van Veldhoven, M., & Schalk, R. (2018). Well-being, personal success and business performance among entrepreneurs: A two-wave study. *Journal of Happiness Studies*, 19, 2187-2204. <https://doi.org/10.1007/s10902-017-9914-6>
- Fukushima, M., N. Taji, & S. Igarashi. (2022). Gaiteki Atsuryoku ni yoru Douji Tahatsuteki Spinoff syutsugen to Network Formation: Alps Electrics Morioka Kojyo kara no Spinoff no jirei. [Series of Spinoff Emergences Caused by Exogenous Pressures and their Network Formation: A Case of Spinoffs from Morioka Factory of Alps Electronics], *Kigyoka Kenkyu* [Entrepreneurial Studies], 19, 83-95 (in Japanese). https://doi.org/10.34418/fes.19.0_83
- Hetschko, C. (2016). On the misery of losing self-employment. *Small Business Economics*, 47, 461-478. <https://doi.org/10.1007/s11187-016-9730-0>
- Ivanycheva, D., Schulze, W. S., Lundmark, E., & Chirico, F. (2023). Lifestyle entrepreneurship: literature review and future research agenda. *Journal of Management Studies*, 61(5), 2251-2286. <https://doi.org/10.1111/joms.13000>
- Kahneman, D., Diener, E., & Schwarz, N. (Eds.). (1999). *Well-being: Foundations of hedonic psychology*. Russell Sage Foundation.
- Kautonen, T., Soto-Simeone, A., & Kibler, E. (2024). Unpacking the relationship between sense of

- place and entrepreneurs' well-being. *Small Business Economics*, 1-29. <https://doi.org/10.1007/s11187-024-00937-9>
- Kenney, M. (Ed.). (2000). *Understanding Silicon Valley: The Anatomy of an Entrepreneurial Region*. Stanford University Press. <http://www.sup.org/books/title/?id=654>.
- Kibler, E., Wincent, J., Kautonen, T., Cacciotti, G., & Obschonka, M. (2019). Can prosocial motivation harm entrepreneurs' subjective well-being? *Journal of business venturing*, 34(4), 608-624. <https://doi.org/10.1016/j.jbusvent.2018.10.003>
- Kollmann, T., Stöckmann, C., & Kensbock, J. M. (2019). I can't get no sleep—The differential impact of entrepreneurial stressors on work-home interference and insomnia among experienced versus novice entrepreneurs. *Journal of business venturing*, 34(4), 692-708. <https://doi.org/10.1016/j.jbusvent.2018.08.001>
- Nikolaev, B., Boudreaux, C. J., & Wood, M. (2020). Entrepreneurship and subjective well-being: The mediating role of psychological functioning. *Entrepreneurship Theory and Practice*, 44(3), 557-586. <https://doi.org/10.1177/1042258719830314>
- Lerman, M. P., Munyon, T. P., & Williams, D. W. (2021). The (not so) dark side of entrepreneurship: A meta-analysis of the well-being and performance consequences of entrepreneurial stress. *Strategic Entrepreneurship Journal*, 15(3), 377-402. <https://doi.org/10.1002/sej.1370>
- O'Mara, M. P. (2020). *The Code: Silicon Valley and the Remaking of America*. Penguin Books.
- Parasuraman, S., Purohit, Y. S., Godshalk, V. M., & Beutell, N. J. (1996). Work and family variables, entrepreneurial career success, and psychological well-being. *Journal of vocational behavior*, 48(3), 275-300. <https://doi.org/10.1006/jvbe.1996.0025>
- Rath, T., & Harter, J. K. (2010). *Wellbeing: The five essential elements*. Simon and Schuster.
- Roche, M., Haar, J. M., & Luthans, F. (2014). The role of mindfulness and psychological capital on the well-being of leaders. *Journal of occupational health psychology*, 19(4), 476. <http://digitalcommons.unl.edu/managementfacpub/126>
- Ryff, C. D. (2019). Entrepreneurship and eudaimonic well-being: Five venues for new science. *Journal of business venturing*, 34(4), 646-663. <https://doi.org/10.1016/j.jbusvent.2018.09.003>
- Saxenian, A. (1994). *Regional Advantage: Culture and Competition in Silicon Valley and Route 128*. Harvard University Press. <https://doi.org/10.2307/j.ctvjnrsqh>
- Shane, S., & Venkataraman, S. (2000). The promise of entrepreneurship as a field of research. *Academy of Management Review*, 25(1), 217-226. <https://doi.org/10.5465/amr.2000.2791611>
- Seligman, M. (2018). PERMA and the building blocks of well-being. *The journal of positive psychology*, 13(4), 333-335. <https://doi.org/10.1080/17439760.2018.1437466>
- Sevä, J. I., Vinberg, S., Nordenmark, M., & Strandh, M. (2016). Subjective well-being among the self-employed in Europe: macroeconomy, gender and immigrant status. *Small business economics*, 46,

- 239-253. <https://doi.org/10.1007/s11187-015-9682-9>
- Sherman, C. L., Randall, C., & Kauanui, S. K. (2016). Are you happy yet? Entrepreneurs' subjective well-being. *Journal of management, spirituality & religion*, 13(1), 7-23. <http://dx.doi.org/10.1080/14766086.2015.1043575>
- Stam, E. (2015). Entrepreneurial Ecosystems and Regional Policy: A Sympathetic Critique. *European Planning Studies*, 23(9), 1759-1769. <https://doi.org/10.1080/09654313.2015.1061484>
- Stam, E., & van de Ven, A. (2021). Entrepreneurial ecosystem elements. *Small Business Economics*, 56(2), 809-832. <https://doi.org/10.1007/s11187-019-00270-6>
- Spigel, B. (2020). *Entrepreneurial Ecosystems*. Edward Elgar Publishing. <https://doi.org/10.4337/9781788975933>
- Stephan, U. (2018). Entrepreneurs' mental health and well-being: A review and research agenda. *Academy of Management Perspectives*, 32(3), 290-322. <https://doi.org/10.5465/amp.2017.0001>
- Stephan, U., & Roesler, U. (2010). Health of entrepreneurs versus employees in a national representative sample. *Journal of occupational and organizational psychology*, 83(3), 717-738. <https://doi.org/10.1348/096317909X472067>
- Teece, D. J. (2007). Explicating dynamic capabilities: the nature and microfoundations of (sustainable) enterprise performance. *Strategic Management Journal*, 28(13), 1319-1350. <https://doi.org/10.1002/smj.640>
- Tsujimoto, M. (2024) Jireikenkyu ni okeru jirei no sentaku ni tsuite. [Case selection for case study research]. *Jikken Syakai Shinrigaku Kenkyu [Experimental Social Psychology Research]*, 1-14. (in Japanese). Advance publication by J-Stage on 19 July, 2024 as doi:10.2130/jjesp.2402
- Uy, M. A., Foo, M. D., & Song, Z. (2013). Joint effects of prior start-up experience and coping strategies on entrepreneurs' psychological well-being. *Journal of business venturing*, 28(5), 583-597. <https://doi.org/10.1016/j.jbusvent.2012.04.003>
- Wiklund, J., Nikolaev, B., Shir, N., Foo, M. D., & Bradley, S. (2019). Entrepreneurship and well-being: Past, present, and future. *Journal of business venturing*, 34(4), 579-588. <https://doi.org/10.1016/j.jbusvent.2019.01.002>

Well-being Driven Entrepreneurship

Keiko YOKOYAMA

Kansai University

yokokei@kansai-u.ac.jp

Michi FUKUSHIMA

Tohoku University

michi.fukushima.c7@tohoku.ac.jp

Futoshi AKIBA

Ryukoku University

akiba@biz.ryukoku.ac.jp

Jin-ichiro YAMADA

Kyoto University

yamada.jinichiro.4t@kyoto-u.ac.jp

Abstract: This study introduces the concept of "wellbeing-driven entrepreneurship," which is defined as a form of entrepreneurship that does not prioritize economic rationality but instead places a strong emphasis on the wellbeing of individual entrepreneurs. The study then proceeds to examine the characteristics and impact of this concept through the lens of two case studies, exploring the concept in an exploratory manner.

The case studies revealed the significance of location in wellbeing-driven entrepreneurship and the manner of initiating a business that integrates hedonic and eudaimonic well-being. Furthermore, the introduction of "wellbeing-driven entrepreneurship," a concept that does not prioritize unnecessarily rapid growth, provides a foundation for discussing the creation of genuinely affluent lifestyles and communities, diverging from the conventional discourse on entrepreneurship that emphasizes rapid growth.

Keywords:

Hedonic well-being, Eudaimonic well-being, Sense of place, Lifestyle entrepreneurship